

月刊「神戸っ子」昭和39年8月10日印刷通巻41号 昭和39年8月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

8
月号



monthly magazine kobekko august 1964 no. 41



Mikimoto Pearls

世界で自慢のできる

日本の宝石は

〈ミキモトパール〉です

日本人の美しさをこれほど

ひき立てる宝石は

ないでしょう



ミキモトパール
御木本真珠店

神戸店

三宮・神戸国際会館 Tel. 22-0062

大阪店

堂島・新大ビル Tel. 361-0220

本店・東京都銀座4丁目

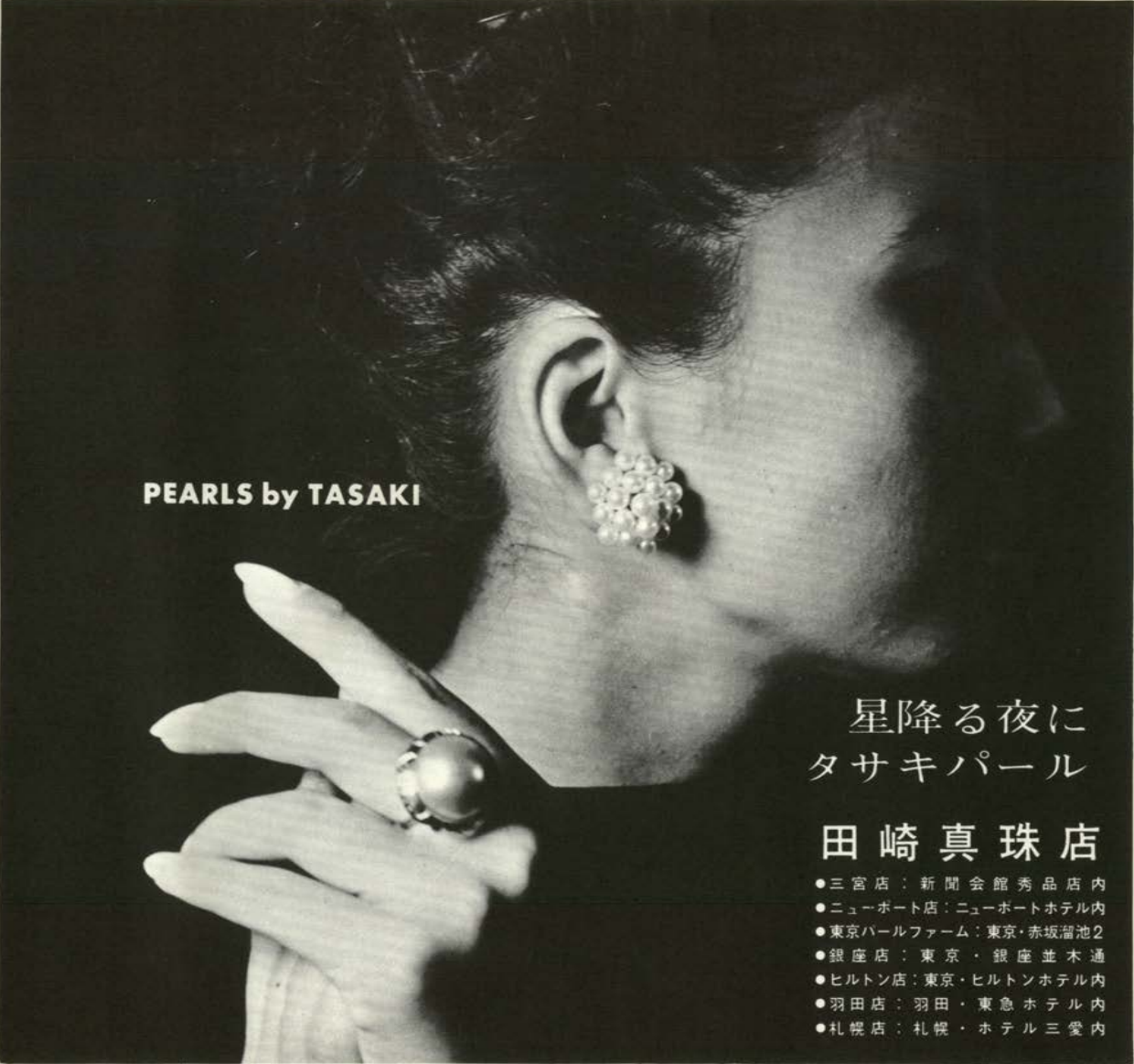
これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





PEARLS by TASAKI

星降る夜に
タサキパール

田崎真珠店

- 三宮店：新聞会館秀品店内
- ニューポート店：ニューポートホテル内
- 東京パールファーム：東京・赤坂溜池2
- 銀座店：東京・銀座並木通
- ヒルトン店：東京・ヒルトンホテル内
- 羽田店：羽田・東急ホテル内
- 札幌店：札幌・ホテル三愛内

エミリー・ミウラ

(ドイツ航空大阪支社勤務)

プールの水がはじけると、エミリーさんの両頬にえくぼが出来た。カナディアン・アカデミーを卒業したエミリーさんは、ドイツ航空におつとめの生粋の神戸っ子。音楽が好きな彼女は、ラジオ大阪「虹のハーモニイ」のディスクジョッキーも担当している。「おつとめから神戸へ帰って来るとほんとするわ」とあざやかな神戸言葉で答え、水しぶきをあげてプールへ飛びこんだ。





Hino

高性能の日野

日野

コンテッサ

神戸日野モーター TEL. 345771 ~ 5

大型バス・トラックのご用命は
兵庫日野ディーゼルへ

TEL. ③47651

われら
神戸っ子

12

岡橋泰一郎

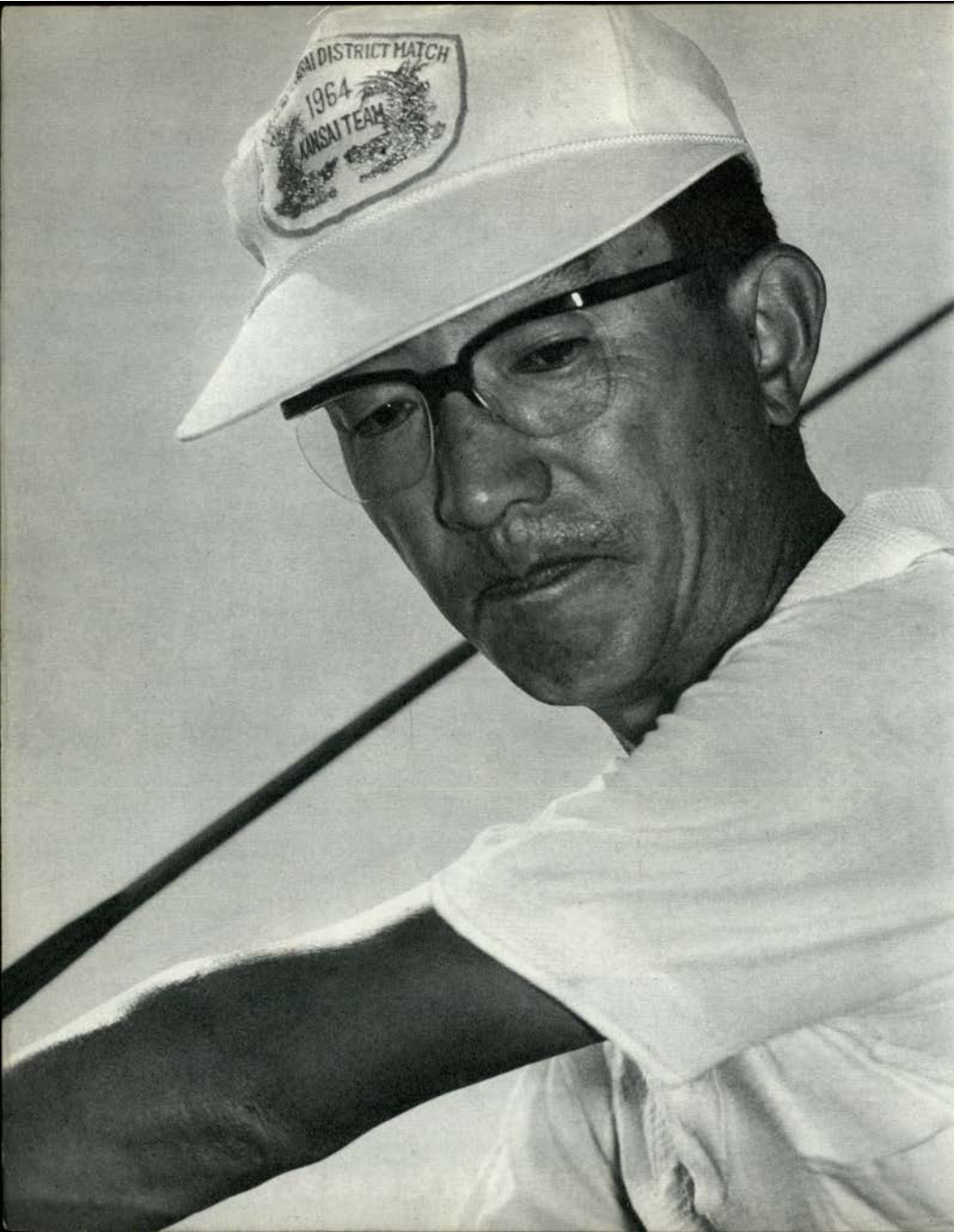
広野ゴルフクラブ・キャプテン
岡橋株式会社社長

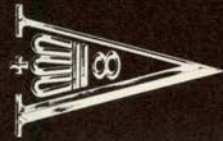
幼稚園から高校までは甲南学園で、大学は京大法科。

昭和2年、小学校5年生のときに、初めてクラブをにぎったという神戸っ子ゴルフファー。「ゴルフの醍醐味は、いいスコアーがでた時だね、一番いいスコアーがでたのは宝塚（バー70）で、アウト32、イン33と65がでた時だ。やはり印象に残っているよ。ゴルフで一番大切なのは、健康の調整だと思っています」といわれる。

六甲・小野ゴルフクラブ（グリーン委員長）

撮影／西村雅司





〈新発売〉

トヨタ クラウン



トヨタ自動車株式会社

TEL 565051

8月号目次 くるま特集号

SECOND COVER/絵・中西 勝	1□	□35	オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト(その2)
グラビヤ/われら神戸っ子・撮影/西村雅司	2□	□41	ヨーロッパの旅から/男子専科あれこれ ・小林延光
⑪エミリー・ミウラ ⑫岡橋泰一郎		□47	暮しのバラエティ No. '6/車のおしゃれ
わたしの意見/直木太一郎	9□	□51	座談会/自動車よもやま話 大久保怜・新谷秀雄 大牧暁子・山口良夫・北村徳太郎
随筆3題/車・くるま・クルマ・高田二郎	10□	□57	ピンクコーナー(T)
パレードひき受けます・山之内豊吉		□60	神戸からのドライブコース
私の若返り法・辻 吉之助		□62	神戸自動車紳士録・自動車こぼれ話
随筆/地方知識人・小松左京	15□	□64	神戸遊戯誌/ヨット①・青木重雄
連載随想第24回/心そこにあらざれば・白川 渥	17□	□66	神戸うまいもん巡礼 No. 24/赤尾兜子
連載随想第12回/白砂の記・阪本 勝	19□	□68	紳士入門⑩/ゴシップ紳士・竹田洋太郎
神戸っ子放談/浅田長平	33□	□70	ポケットジャーナル/花時計/はいからコーナー
経済ポケットジャーナル	26□	□72	KOBE SHOPPING GUIDE
るぼるたーじゅ・コウベ①/神戸海運記者・ 松原新一	29□	□78	連載・第16回/神戸夫人・武田繁太郎
映画のこと手当り次第⑥/淀川長治	36□	□82	愛読者サロン・編集後記
こんにちわ船長さん③/アリラン号船長・ きく人・玉奥 章	38□	□84	グラビヤ/駅から10分・撮影 緒方しげを
表紙/小磯良平・撮影/米田定蔵・デザイン/橋 正三			





MAC MEN'S CLUB MEMBER

よりの お声!!

アイビー的な タイ止・ペンダント
マックで 創ってはと アンケート
多数いただき マック企画室では
頭をヒネッテ!!

アメリカ貨幣で 日本で初めての
試みをつくってみました
ご愛用をおねがいします。

マックオリジナル
コインタイ止 ㊦ 300
コインペンダント㊦ 300

男の服飾

マック

三宮本店 神戸センター街
TEL ㊦ 0895
トアロード店 センター街西口
TEL ㊦ 0896
新聞地店 新聞地本通り
TEL ㊦ 7688
姫路店 姫路駅デパート
TEL ㊦ 1261

Fachreim's

ドイツ菓子

吟味された材料に
洗練された技術を
加えて“生”の持味
を充分に生かした
お菓子です。

ピラミッド

ビスケット

各種ケーキ

各種詰合せ

ユーハイム

本 店・三宮生田神社西隣
三 宮 店・大丸前 市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店

＊わたしの意見

バランスのとれた人間づくりを

直木 太一郎 (神港倉庫株式会社 取締役社長)

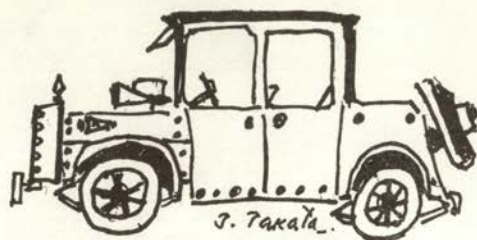


先頃、四国の今治に出かけた。そのときのことである。某所で、NHK主催の全国のだ自慢コンクール優勝者の発表会が行なわれた。それを私も拝聴した。激烈な競争を勝ち抜いて、優勝の栄誉をかちとられた人の歌ばかりである。上手なのは当然である。感心しながら聴いていた。

ところがである。優勝者の歌の発表が、すべて終わったあと、ゲストの今井邦恵さんがお得意の歌を披露された。今井さんは、今治の生んだ数少ない音楽家の一人である。今井さんの歌に聴き惚れながら、私は先に歌ったのだ自慢優勝者の歌といやおうなしに比較しないわけにはいかなかった。そして、そのおおい隠しようのない「差」に、驚きもし、感心もしたのである。それはたんに、しろうとくろうとの違いというようなことではない。そこには、もう少し根本的な相違がひそんでいるように思われる。いわば、たんなる俗受けを狙ったものと、本格的な芸術との間にある明瞭なへだたりといってもいいであろう。このささやかな体験から、私はいろんなことを考えさせられた。大げさにいえば、そこから現代日本における《文化》なり《精神》なりの歪みを引き出すこともできるのである。なるほど、今日の日本には有能なタレントがウジャウジャといる。のだ自慢優勝者もその一人にはちがいない。だが、彼の歌が、私どもの心を、その奥底において感動せしめえないのはなぜだろうか。おそらくそれは、その歌が歌い手の人間としての内面的な豊かさによって、少しも裏づけられていないからである。いくら歌が巧くても、それはただうわべだけのことにすぎない。これはあえていえば一種の畸形的人間ではあるまいか。

私どもは、自分の内部を豊かに育てあげるといふ努力を怠っているように思えてならぬ。脳髓が干からびたおからのように小さく、身体だけがでかい太古の恐竜時代を思わせる現代である。私は、バランスのとれた人格を、現代における理想像としたいと願っている。

□ 隨筆三題 □



カット・高田 二郎

クルマ・くるま・車

高田 二郎

(洋画家・一水会)

私が運転免許をとったのが昭和二十二年、自分用の車を持ち出してから現在のを含めて十一台目、最近の過去七台連続してヒルマンばかりの愛用者である。

思い出すのは、私が終戦後の一時期勤務していた米國駐留軍交通部の実施した神戸の街における自動車に関する様々な行政的措置である。当時の車といえは進駐車の

ジープだけがわがもの顔に走りまわっていた。私たちの利用できる車といえは今から思えば、こっけいな木炭車という怪物の様な車で、バスもタクシーも皆これである。車の背後に不様なかつこの風呂オケのような釜をつけ木の切れ端をたきエントツから黒煙をふきながらノロノロと走ったものだ。その上、神戸は坂道だらけ、文字通り息も絶えだえに黒煙をふき出しながら坂道をはい上った。それも稲妻形に少しでも登りの角度を少くしないと登れなかった。

当時の花形ジープも正式の名称で申せば、 $\frac{1}{4}$ トン軍用トラックで乗車用ではなかった。だからクツションは、現在の軽四輪トラック以下のかたさであった事が思い出されるが、馬力と加速度だけは小型のくせに抜群のものであった。

現在の交通地獄から見れば、当時の駐留軍のとった交通行政面において見ならうべきところがあった。彼らの第一に行ったことは、道路標識、交通標識の完備とそれに伴なう交通違反者に対するてきばきとした処分の実施であった。第二に、神戸の東西と南北に走る主要道路に彼ら特有の名称をつけた。東西の横に走る道にはアメリカの各州の名前、南北の道路には番号を。何か事件がおきる、テキ

サスや avenue ○○番 street の地点というだけで地理不案内の彼等にはもちろん、我々にもその場所がピンとわかったものだ。

数多くの交通標識の中で、最も多く設置されたのは、『一時停止』と『速度制限』の標識。

市電の乗客が乗降している時は必ずそれが終る迄一時停止という常識通りの事を実行した。

当時のスピード制限は市街地で時速三十哩、すなわち約四十五杆阪神国道その他の市街地では、時速五十哩、すなわち約七十五杆であった。当時と現在では交通事情は雲泥の差。もし現在なみの交通事情であったとすれば、彼らは市内の制限速度は時速二十杆以下にしただろう。只今は市内の制限時速は四十杆、しかもこの制限以内で走っている車を見つけるのは困難なくらいだ。

ジープ万能時代がすぎると新しい外車がかはでな姿を見せはじめる日本人はまだ乗れなくて、外国人だけが所有できた時代。どうしても初物喰いの味をがまんできぬ一部の人間が、高価な名儀料を払って外人名儀の車に無理矢理に乗って喜んだこっけいな時代だった。

この外車美望の一時期をすぎる頃から、国産の車達が続々と台頭しはじめる。技術的にも驚くべき

進歩発達をしめしながら、多量生産時代へと移行し、またたく間に現在の交通ラッシュを引き起すにいたった。テンボの遅い交通行政ではどうにもならない現状、この間、日本の特性を打ち出したのがミゼットに軽四輪のたぐいである街を走っている時、全くハエの様にうるさく気を許さないが、狭い日本の道路状況でもう一番便利な実用品の一部と相成った感じ。只許せないのは、おきまりの様に坂道をのぼる時に、小さい図体のくせに工場の煙突なみの煙を排泄する事だ。有色の排気煙は衛生的にも交通安全性にも、都市美的にも感心したものではないはず。整備不十分というものだ。

神戸の街は昔からハイカラであかぬけた街というのが魅力。せめて神戸の街だけでもあかぬけた車の走り方をしたいものだ。

パレード

ひき受けます

山之上 豊吉
(山之上 洋服店 経営者)
(東京海上火災自動車保険代理店代表者)

自動車好きな私に、パレードのオープンカー運転をやってみないかと声の掛ったのは、昭和30年のミナト祭の時であった。

「そりや、面白かるう」といい気になって手伝ったのが病みつきで、ミス・神戸、ミス・姫路、ミス・明石などのパレードがあるとオープンカーの運転台に乗ることになり成った。爾来、洋服業であるにもかかわらず「パレード」というと「山之上さん、頼んまっせ」と電話がかかって来る。

運転を始めて4年目、ミス・明石のパレードでのこと。当日は曇り空だったが明石市役所前を発、案のじよう、途中で俄雨が降



みなと祭のパレード

り出した。ミス・明石を乗せた私の車は、借りもので長い間使っていないらしく、屋根が錆びついて全然あがって来ないのである。大粒の雨は情容赦もなく美人のドレスに降りつける。そこへ若ものが三、四人で、エッサエッサと三輪車のオープニングをかついで来て屋根がわりにかけてくれた。やっこのことで車を動かしたが、どしゃぶりの雨はオープニングにたつぷり水溜りを作り、3人のミスの上にはたちまちザッーと降りそそいでし

まった。1枚しかないドレスだから着換えも出来ない。どうにもこうにも人魚を乗せて走っているような具合であった。

この事件で、私はミス・神戸に関わるパレードから手を引くことになり、そこで私は、オープンカーを買おうと一大決心した。現在、プリムスベルデア、シボレーベレア、シボレーツーンテンの3台がひかえている。

それ以来、海の女王、南海優勝阪神優勝、朝潮優勝などのパレード、また高松宮殿下、河野大臣、河上丈太郎氏、西尾末広氏、金井知事、原口市長のおえら方から歌舞伎役者など多士済々の顔ぶれをお乗せした。その内にどこで聞かえたかお宮さんから口がかかり、生田、三宮、二宮神社、はては大阪の住吉さん、今宮えびすまで遠征する有難さである。

乗る人にもクセはある。

高松宮は、自動車のドアを忘れて、気軽ろく「やあゴクロウ」とまたいで乗られ、またいで降りられた。金井知事はおとなしい乗り方だ。前阪本知事は大変くだけた乗り上手である。ミスとつくお嬢さん方も初めは上手くないが、バトンタッチする頃にはやっとうまくなる。警察のおえら方も日頃に似合わず後の座席へたどりつく迄

が大変タドタドしい。やはり上手いのは外人である。ワシントン州知事は手のふり方、笑顔の加減が素晴しかった。シアトル航空の社長夫人は「あなたの車はワンダフル！」とほめ、その明るい愛嬌のふりまき方は今でも印象に残っている。

パレード運転もなかなか難しい。時速は常に5キロ。そして乗る人に車がスタートしたか、チェンジしたか、ストップしたか判らぬように振動を与えずスムーズに走らせるのがコツである。今は、短大を出た娘が1台運転しているが、親娘2人で趣味と実益をかねたパレードを慎重に、かつ楽しく運転している。

私の若返り法

辻 吉之助

(音楽家)

私が自動車の運転免許を取ったのは、59才の時です。これには、試験官諸氏もびっくりしていたようです。もともと老人で車を運転している人は、たくさんあります。が、よわい59を数えるようになってから、さて車の免許をとろうなんて人は、そうざらにはいないでしょう。年はとっても、気は若い。そううめぼれている次第。

実をいうと、自動車にこる前に私は永い間、オートバイに親しんできました。今から40年ほど昔になりました。今から40年ほど昔に知り合った友人から、米国製のヘンダーソンという四気筒のオートバイをもらったのが、病み付きのそもその始まりでした。オートバイで鍛えた運動神経が、車の運転に際しても、大いに役立っているように思います。

最近、家内も免許をとりましたが、これは私が酔っぱらった時に、身代りに運転してもらったためです。もともと、まだまだ安心して運転をまかせられるというところまではいきません。

三年ほど前のことです。信州まで遠出したことがあるのですが、それがヒドイ悪路の連続だったのには、大弱りでした。猛烈な泥道で、そこをトラックが走りまわっているのだからタマリマセン。トラックの重みで深くへこまされた道では、いくらもがいても車はカラまわりするばかりなのです。さてどうしたものかと思案投首。さいわいそこがわずかに坂道になっていたので、ひとまず大きく後退し、そこで大スピードを出してその難所を乗り切ってしましました。といっても、こういうこともドライヴァーにとっては、なかなか楽しいことでもあるのです。

口では弱った弱ったといながら、この難所をどうやって乗りこえるか、その工夫に頭をひねるのも、ひそかな楽しみだった。それから、それこそ病い膏盲にいたる類だと笑われるでしょうか。しかし、少くともドライヴァーにとって、車を自分の手足同様に、自由自在に動かせるようにならない限り、なんの妙味もないといってしまう。殊に車が混雑を極めている都心で、一瞬のスキを狙って、すっとそこを通りぬけるときなどは、なんともいえないいい感じ。これはドライヴァーでなければとても味わえぬスリルです。

いちど家内同道、愛車を駆って日本全国一周を敢行したい、現在の私の、それが唯一の悲願です。ただヒマと金がなくて、いったいいつ実現できるやら、心細いのですが。

昨年、大動脈の手術を受け、家族、知人、友人にずいぶん心配をかけましたが、まだまだ「若さ」は失なっていないつもりです。毎日のように車を運転することでは、童心に返り、身も心も若返っていくような気がしています。ともかく車に乗るのが好きです。たまたま私は、66才の老春を車の中で謳歌している今日この頃です。



KITAMURA PEARLS

世界の人々に
愛される
キタムラパール

北村真珠株式会社

神戸ノ元町2・東照ノスギヤ橋ビルダー
TEL 330072 TEL 45716022

世界中の人からほめられた
日本の誇り 神戸のほまれ

マロングラッセは ヒロタの銘菓

元町通三丁目 TEL 33 二三四〇番

北欧の銘菓

幣社の登録商標



- ☐ ピラミッドケーキ
- ☐ バウムクーヘン
- ☐ ク ッ キ ー
- ☐ ム ン デ ッ ト
- ☐ シ モ ン

ユーハイム コンフェクト

本社・工場
熊内店
三宮店

神戸熊内町1(市立美術館東隣)
TEL. 22-2336・1164・1165
神戸三宮生田筋(階上喫茶室)
TEL. 33-7343・0156・4314



フレッシュな
あなたを創る
おしゃれメガネ



めがねの専門店

神戸眼鏡院

元町3・㊦3112-3㊦1443
㊦0551(貿易部)

地方知識人

小松 左 京

昨年「放送朝日」という雑誌のルポをたのまれ、九州から瀬戸内へかけて旅行した。かけ足の旅行で、あまり大したこともできなかったが、それでもできるだけ、その土地の人にあうことを心がけた。あってみて、非常におどろいたのだが、地方のちょっとしたお役所とか、学校とかに、実に堂々たる知識人がいるのである。——知識人といっても、ジャーナリズムで食べてる職業的インテリや、ベレーをかぶって喫茶店でクラシック音楽をきいているレッテルばりの文化人ではない。一見ごく平々凡々の勤め人でいながら、話して見ると、地方政治、経済などについての問題把握の確さ、「文化」なるものに対する見識の高さなど、時には、こちらがたじたじの思いを味わわれることもあった。

——日向高千穂といえは、庭のサンシュの木で有名な椎葉とともに、山また山の奥の、典型的な秘境と思っていたが、この町の公共建築の近代的でありつばなのと、町役場であった初老の人の、町の「政治」についての説明の的確さや、「地方社会主

義」についての一言言には感心した。また、下関市役所では、その職員の人たちが出している同人誌の論文の姿勢の正しさにちよつとうたれた。とりわけその中で、大週刊誌の依頼をうけて下関のルポを書いた東京の新進若手評論家の、軽薄で思い上った書きぶりを、やんわりと、しかしみごとな正攻法でとちめているのがおもしろく、「一本ノ」と声をかけたいくらいだった。

広島でも、松山でも、高松でも、こういうしっかりした「知識人」が、思いがけぬ所にいた。——などと書くと、こちらが最初から地方の、とくに西日本の文化程度を、不当に低く評価していたように思われるかも知れないが、事実はその逆で、私としては、「中央」よりもかえって地方で、知識人らしい知識人にであってびっくりしているのである。

なによりも感動したのは、そういった地方知識人の思惟のおりめ正しさ、せまいがしっかり身につけている教養と論理、ものごとの判断のたしかさといったものだった。それは中央でごまんと見

かける知識人の軽薄さとは、まさに対照的なものだ。中央の知性というものは、このごろますますタレント化して来て、その必然の結果として、もつとも反知性的な事大主義、権威主義のアカにまみれつつあるのに、こちらはいわば埋没精神に徹して、くだらぬものにはあまり目をくれず、「精神」や「知性」の機能について明確な意識をもち、しかしささやかな共同体の中では、しっかりとした判断の軸の役わりを果しているのだ。——実際のところ、ちゃんな総合雑誌などを毎月よむよりは、こういった人たちと話している方が、はるかに知性の訓練にもなり、刺激になる。特に知識人の中でも、老人がいい。

これは考えてみればあたり前の話かも知れないが、んらい思惟とは孤独な作業であり、知性や精神は長い閑暇による蓄積と、醇化、醗酵によって、はじめてそれらしい形をとるものだ。——などと大げさにいわなくても、知性というやつは、あまり俗事や流行にふりまわされず、ポカンとして天井をながめていたり、じっくり本を読んで、ゆうゆうと反芻するひまがなければ、一向に「高度化」しない。あまり知性的になろうとガツついたり、他人の知性と鼻一つの差でぬきつめかれつることに血の道をあげたりしてはすりへってしまうばかりだ。要するに、人間、知性的になるには、教養・プラス精神的ひまが必要なのであり、この精神的ひまというやつが、中央にはまるつきりないのである。いくら中央にいても、知識人ぐらゐは俗事やジャーナリズムから超然としていたらよさそうなものだが、なにしろ中央というところは、や

たら知識人、文化人、ジャーナリストが多いところで、そのつきあいやら何やらのうるさいことお話にならない。現在の中央という所は、知識人のありかたが環境に決定されている所であり、ジャーナリズムとの関係において、「知識人」のレッテルのためにたえざる緊張をしいられている所だ。

——だから私は、どうもこれからの日本において江戸時代後期から維新前夜にかけてのように、文化の比重が中央より地方に徐々にうつて行くような事態がおこりそうな気がする。その知的ポテンシャルは、どう見ても、関東より西日本の方が高いのである。ただ、ここで考えなければならぬのは、そういう「地方知識人」のいろんなエネルギーを、その地方において充分に生かして行くべき、その地方ジャーナリズムと、それと密接な関係をもつ地方政治が、現在存在していないのではないかということだ。——現在中央は、政治面でも文化面でも、そういった地方的エネルギーをたくみに吸いとることによつて巨大化し、生きのびている。だが、最近の中央の頽廃ぶりを見ると、どうもこのままほつたらかしておいたら、日本文化自体が、ひどく荒れはててしまひそうな気がしてならない。——一つ、地方ジャーナリズムなり、地方政治なりが、いつまでも中央によつてかかたり、地方性でもつてみずから規制したりせず、この地方こそが、これからの「日本文化」の中心になるのだ、ぐらゐの意気どみで、地方知識人のエネルギーを、フルに生かすところをやってみると面白いのだが。

(作家)